

追悼 松原正先生

本紙編輯部の了承を得たので、今回は恩師早稲田大學名譽教授松原正先生の御逝去を悼む文章を綴らせて頂く。

去る四月初旬、先生が餘命一二箇月の末期肝臓癌と診断され入院されたとの知らせを奥様から頂戴して、私は驚いて寓居のある仙臺から急遽御茶ノ水の病院に駆けつけた。先生は態々ベッドから車椅子に移つて迎へて下さつたが、口は殆ど開かれなかつた。暫く奥様と話をしたりしてゐる裡に、先生にやや御疲れの様子が見えたので、ベッドに戻つて頂き、名残り惜しかつたが御暇乞ひをしようとする、先生が横になつた姿勢の儘で、やにはに兩腕を大きく廣げて私の方に差伸べられた。先生の手を握つて、「先生、頑張つて下さいよ」と申上げると、先生は黙つて靜かに頷かれた。私の見た先生の生前最後の姿であつた。

「言論は虚しい」、晩年が近づくにつれて、先生はよくさう仰り、文章にも書かれるやうになつた。先生が長年師事された福田恆存もさうである。この御二人のやうな見事な本物の知識人が言論の虚しさを揃つて託たねばならぬといふ事の甚だ深刻な意味合を、世人はどう考へてゐる

るのであらうか。抑々それを自覺してさへるまいか。先生が亡くなられてからといふもの、私は頻りにそんな事を考へてゐる。所詮この國では言論は虚しいのか。知は力たり得ないのか。

福田恆存も松原先生も森鷗外の所謂「二本足の學者」であつた。「東洋の文化と西洋の文化とが落ち合つて渦を卷いてゐる」近代日本に於て、「東西兩洋の文化を、一本づつの足で踏まへて立つ」べく眞摯に努めた知識人であつた。現在刊行を急いでゐる松原正全集第三卷第一歩「戦争は無くならない」は、「二本足の學者」たる松原先生の正に面目躍如たる論攷だが、それは無論「戦争は無くならない」に限つた事ではない。既刊の全集第一卷「この世が舞臺」を繙いても、第二卷「文學と政治主義」を繙いても、先生の「洋魂」への本質的理解と「和魂」への眞率な愛情とが、「二本足の學者」ならではの強靱な二元論のディアレクティクとなつて表出せられる有様を讀者は隨處に見出すであらう。

福田恆存は西洋文學の翻譯といふ「文化的・平和的略奪行爲」を最後まで諦めようとせず、松原先生はそれに早く見切りをつけられ、さういふ點、「洋學の果實の輸入」（鷗外）の問題について師弟に樂觀悲觀の違ひはあつた。だが、「二本足の學者」を必要とせざるを得ぬ吾國の

根本状況、近代日本の最も深刻な宿命の認識に於て何ら本質的な違ひはなかつた。そして、かつては鷗外のみならず、漱石や荷風のやうな優れた先達もそれを痛切に自覺してゐた。

「西洋を怖がらないやうになつてから日本は駄目になつた」と、いつぞや先生は私に云はれた。「洋魂」の何たるかを辨へぬ夜郎自大、即ち昨今の浮薄な「一本足」の跳梁を先生は最後まで憂いてをられた。しかし、鷗外が夙に喝破したやうに、日本には「二本足の學者が容易に出て來ず」、「一本足同士が、相變らず葛藤を起したり、衝突し合つたりしてゐる」といふのが、明治の昔から平成の今に至る迄、相も變らぬ吾國の情けない現實なのであつて、「二本足」の知的緊張の厄介に耐へ得ず、「一本足」の知的怠惰の安逸に逃避したが、宿痾とも云ふべき脆弱な國民性が克服されぬ限り、未來永劫、「二本足の學者」たらんとする者は言論の虚しさを託たざるを得ぬであらう。

だが、松原先生は「二本足の學者」の壯絶な格闘の跡を遺して逝かれた。種子は撒かれてゐるのだ。それを少しでも成長させる爲に、先生の著作が一人でも多くの讀者に、取分け若い讀者に讀まれる事を私は願つて已まない。